
Love Me, Baby!

常葉あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e M e , B a b y !

【Nコード】

N 2 1 9 1 B

【作者名】

常葉あい

【あらすじ】

俺、赤峰純。今年、商社マン三年目の二十五……ごめんなさい、サバ読みました。今年四年目の二十六。なんでこんな自己紹介してるかって、そりゃあなた、これは俺とヒナこと佐久間日奈子の心躍るラブストーリーだからさ！

第一話：へたれと小悪魔、どっちが上だ！？

俺、赤峰純。今年、商社マン三年目の二十五……ごめんなさい、サバ読みました。今年四年目の二十六。いや、なんでサバ読もうとしたかって、そりゃあとあと話すけどさ。今はとりあえずスルーして。うん。ごめんね。

で、なんでこんな自己紹介してるかって、そりゃあなた、これは俺とヒナこと佐久間日奈子の心躍るラブストーリーだからさ！

……って、ちよつとちよつと、違う違うこつちこつち！

もう、なに違う方向に歩き出そうとしてるんだよ。え？ 色ボケな話なんて聞きたくもない？

まあそう言うなって。絶対おもしろいから！ 保証する。俺があんなたちが楽しいようにやらせ、もとい脚色して話してやるから。

虚しくないかって？ まさか、俺とヒナの愛の奇跡だよ？ 多少の脚色もお天道様が許してくれるさ。

……って、ちよつとちよつと！ 悪かった。俺が悪かったから、頼む、話を聞いてくれよ。な？ この通り！ ここで会ったも何かの縁さ。聞いていったって損はないだろう？

さて、そんなわけで、三時間スペシャルでお届けします。……時間じゃピンとこないな。ええと、つまりなんだ？ 中編スペシャルでお届けしますってよ、作者さん。いや、こつちの話。

そしてスポンサーは俺、赤峰純の提供でお送りします。

事の始まりは二年前。俺はサラリーマン二年目で、ヒナは高校に上がった時。

欠伸をしながら自転車を取り出す俺の元に、真新しい制服を着たヒナが来た。そのことがきつと、俺の人生を変えることになったん

だと、今から考えるとと思う。

「純ちゃん！」

ヒナはお隣に住んでる妹みたいな存在。そんな風に思っていた俺は、ヒナの声に笑顔で振り向く。瞬間、俺の目に飛び込んできたのは、見知らぬ女の子だった。

「え、ひ、ヒナ？」

「そうだよー。見てみて、似合うー？」

紺色の、えんじの縁取りがされたセーラー服。線の細いヒナは、まるで制服に着られているようだ。けれども白い肌は紺色の制服のせいで余計に白く見えた。普段は降ろしたままの髪を、今日は二つの三つ編み、とは言っても野暮ったい三つ編みではなく、可愛らしく下に行くほどに細くなる三つ編みで結っている。膝よりも少々短いスカートはヒナの足をよりほっそりと見せていた。

やばい。

何がやばいのかわからんけど、とにかくやばい。うん。すげーやばい。

俺は思わず顔を背ける。

「純ちゃん？」

高い可愛らしい声が、俺の心臓を揺さぶる。「あ、い、いや、なんでも。ええと、今日から、高校？」

なんつーしどろもどろな俺の質問に、ヒナが笑って答える。なんて答えたっけな。良く覚えてない。

……そりゃもちろん、ヒナの可愛さにぼーっとして。

ごめん。ごめんって！ いや、本当だからどうも言い訳できないけど。

で、それが二年前の話。

さて、ここから早送りね。キュルキュルキュルー。

あれから二年。

俺とヒナの関係は、あの頃のまま幼なじみなわけで。

「純ちゃん、おつはよー！」

今日も俺の理性が吹っ飛びそうな声が、部屋に響き渡った。

寝ていた俺はのっそりと起きあがると、部屋に入っていたヒナを見た。が、次の瞬間目をそらす。なんちゅー格好してるんだ。おいおい、仮にも男の部屋に入ってくるんだから、キャミソールとかミニスカートはいただけないと思うんだ。うん。俺は。

なんて俺が思っただけ抱えていると、ヒナのさらった髪が目の隅に映った。

「どしたの？」

案の定というか、なんていうか。ヒナが俺を覗き込んできている。いや、その角度やバイから。胸、胸が見え……いやいや、見てない見てない。ていうか、ほら、その足とかさ。ちよつとスカート短すぎないか？ て、違うだろ、俺。

ヒナが俺の足下に座る。長い髪を耳にかける仕草に見とれたが、ヒナがこっちを向いたからハツとした。

「あのさ、男の部屋に入るのに、その格好はどうかと思うぞ、お兄ちゃんは」

そう。俺とヒナは八歳離れてる。お隣さんの、俗に言う幼なじみだ。もちろん最初からヒナが好きだったわけじゃない。さっき話した通り、ヒナが高校にあがった二年前。俺は急に大人びたヒナに恋をした。

自分の気持ちに気がついた時から、俺はヒナを見守るようにして傍にいた。好きになった当初、何度も気持ちを伝えようかと考えた。けどその度に、まだ早いと思って我慢してきたのはヒナのためというよりも、自分がヒナを傷つけないかったからだ。

だから未だに、ヒナは俺の気持ちを知らない。あれから二年たって、こんなにも綺麗になったヒナに、どう告げるのか。そもそも告げて良いものなのか。それすら俺はわからなくなっている。

「純ちゃんはお兄ちゃんじゃないでしょ……純ちゃんにとっては、

私は妹みたいなもんかもしれないけどさ」

苦笑気味に言われて、我に返った。違う。妹なんて思っていない。そう言えたら。そうは思ったけど、俺はヒナに気がつかれないように、頭を振った。

「ヒナ……」

ベッドに腰掛けるヒナは、不思議そうに目を丸くしながらこちらを見ている。俺は掛け布団を脇にどかすと、ヒナに顔を近づけた。ヒナは俺をじっと見ている。俺もできるだけ優しくそうに見えるように笑顔を浮かべてヒナを見た。

あと三十センチ。

ドキドキと心臓の音がうるさい。今この場で、ヒナの唇を奪った。そしたらヒナは、俺の気持ちに気がついてくれるだろうか？

「も」

も？

「もう、純ちゃんたら、なに深刻な顔してんのー？」

ふわっと風が舞って、ヒナが急に立ち上がった。

いや。うん。えーと。

「純ちゃん、そういえば、朝ご飯食べようっておばさんが」

きやらつと悪気無く笑って、ヒナは襖をすり抜けて行った。階段を下りる音が聞こえる。

俺？

もちろん脱力っすよ。

なにこの展開。いや、オーケーオーケー、わかってるって。そうだよな、ここで気持ちを確かめ合ったら、話が終わっちゃうもんな。そんなわけで、俺の苦労はまだまだ続く。らしい。

誰だ、序の口なんて言ったヤツ！

第二話：へたれは意外にモテモテだ！？

さて、所変わって一週間後の会社の昼休み。

俺は同僚根岸に告白され中。一体何人目だっけか。ごめん、俺すげーモテるんだわ実は。え？ 別に謝らなくて良い？ いやごめん、だってほら、本当にモテるヤツがモテるんだなんて、嫌み以外の何ものでもないでしょ？

あ、ああ、だから早く話を進めると。……ごもつとも。

根岸のヤツ、普段はおちゃらけたキャラのクセに、今日はすごい神妙な面持ち。とは言っても、ここは会社の食堂で、周りに人いっぱいいるけどね。

「で、あのね。だから、その」

そつから話が進まない。俺、もう生卵がけカレー食べ終わっちゃったよ。ちらりと時計を見れば、もう昼休みも終わりに近い。じゃない、俺から言うしかないか。

「俺が好きだつて？」

そう言つと、根岸はぱつと赤い顔をこちらに向けた。

さつきからかき回してばかりの山菜うどん、伸びて不味そうになつている。可哀想に。

「なんかさ、あんたがそれ言つと、嫌みにしか聞こえない」

なんでだ。なかなか言わないから代わりに言つてやったんじゃないか。いか。

「そう言われても。もう昼休み終わるしさ」

「嘘！？」

根岸が食堂の柱に取り付けられた時計を見ようと首を捻った。

「マジ？ わ、本当だ。ヤバイ、全然食べてないのに！」

おいおい、それさつきまで告白しようとしていた人の台詞？

慌てて伸びきったうどんを食べ始める根岸に笑ってしまう。そんな俺に気がついて、根岸がちらつと俺を見た。

「あんだねー、言っておくけど、冗談じゃないからね」

「ん？」

「私の気持ちよ！」

ああ、根岸の気持ちね。

「いや、悪いけど、根岸をそういう対象で見たことないから」

ぴたっと根岸の動きが止まった。

この瞬間は、俺はものすごく嫌いだ。なんとも言いようのない空気が、傷つかないように言おうなんて思っていない。どんな言葉で飾ったって、結局傷つけてしまうんだ。だったら傷が長引かないように、一言で言ってしまった方が良い。一瞬で終わった方が良い。

そう思っているから俺はいつでも曖昧な態度は取らないようにしようと思ってる。けれど、だからと言って、何も思っていないわけじゃない。俺だって辛いんだ。解ってくれよ、頼むから。

なんて考えていると、根岸が困ったような笑顔で俺を見た。

「……そっか」

傷ついたんだろう。きっと泣きたいのかもしれない。

俺はそれ以上なにも言えなくて、根岸も残りのうどんを食べ始めて、俺たちの間に奇妙な沈黙だけが横たわっていた。

いたたまれなくて、俺は立ち上がる。

「先、戻ってるわ。……ごめんな」

トレーを返却口に返して根岸の方を振り返ると、黙々と一人、うどんを食べる根岸が見えた。

「で、定期入れ落としたしね」

帰り道一人。肩を落とす俺。

根岸をふった罰なのか。なんて結構俺、凹んでるんじゃないか。まあそりゃ根岸とは同期だし。なかなか気があって仲良かったし。いろいろ助け合ったりもしてきた。一緒のチームに組まされて営業成績あげたことだってある。正直根岸は美人で仕事もてきぱきできて、そのくせ家庭料理も完璧にできるらしいなんて噂では聞いてい

て。好きじゃないなんて言ったら嘘だ。ヒナを好きになる前に、気になっていた人でもあったりする。

俺を好きだったかなんて興味が無かったから、今まで気がつかなかったけど、根岸も俺に対して他のヤツとは違う感情を持っているんだろ？なんて事は今まではつきり解っていたし、他のヤツにも言われたし。だから告白されたことは特に驚くべきことでもないんだけれど。

俺がヒナを好きな以上、根岸の告白は断らなきゃいけないわけで、これからの根岸との関係を考えて、どうにも溜息が出ることを止められない。

そんな日に限って定期落とすか、俺。つか、どこでなくしたんだろ？か。全く心辺りが無い。駅の落とし物室にもなかったっていうし、知らないヤツが使ってるのかもしれない。

幸い、定期は一ヶ月分で、それも残りあと一週間ほどだったし、パスネットは百円くらいしか残ってなかったし、スイカも残金は少なかったはず。良いのか悪いのか。いや、悪いんだけど。

がつくりと肩を落として歩いてしていると、後ろから背中に小さな衝撃。

「純ちゃん！ おかえり！」

ヒナ！

俺が勢いよく振り向くと、ヒナが。笑顔で。ヒナも学校からの帰りなのだろう、よれよれの鞆にテニスラケット。

「おー、今帰り？」

なんて聞くと、嬉しそうにくくんと頷く。

可愛い。ヤバイ、可愛い。こんな可愛いヒナがテニスなんて、男どもの格好の餌じゃねーか！ くそー、スコートはいてるヒナを見れるなんて、なんて羨ましいんだ高校生！

「俺も高校生に戻りたい……」

「え？」

「い、いや、なんでもない」

呟いた言葉を拾われて、慌てて首を振る。

「なんかあったの？ 元気なさそうだけど」

ヒナ……。ちくしょー、じーんとしちゃったよ。ヒナが。ヒナが！ 俺の異変に気がつくなんて。

「定期なくした」

「わー、最悪だ、それ」

なんて言いながら顔が笑ってるよ、日奈子ちゃん。

「笑うなー」

言いながら、俺、精一杯のボディタッチ。ヒナの頭を軽くこづく。ヒナは一通り笑ったあと、あ、と声をあげた。

「何？」

「純ちゃん、次の日曜日、暇？」

日曜？ 俺は頭の中でスケジュールをめくる。

「あー、うん、暇だけど」

「わ、じゃあ遊ぼうよ！」

え、それって、もしかして。

「良いけど……なんかあったっけ？」

高鳴る胸を隠すように言っと、ヒナが頬を膨らませた。

「もう！ 私の誕生日！ 祝ってよ、十八歳なんだから」

忘れるわけがない。ヒナの誕生日。一体何年、隣に住んで思うんだ。幼なじみをなめんなよ。

「わかってるって。忘れるわけないじゃん。ヒナのことなら、忘れるわけない」

精一杯の主張。ていうか、気づけ。俺の気持ちに、気づけ……！ ちらっとヒナを見ると、なにやら神妙な顔を一瞬して、その後笑顔に戻った。

「本当にー？ 怪しいな。純ちゃん、モテるしなあ」

何だったんだろうか。今のヒナの顔。不機嫌そう、顔。そんなこと考えて、一瞬答えに詰まって。ヒナが困った顔で俺を見て、俺は慌てて笑顔を作る。

「モテないって、俺。それに俺、ヒナに嘘言っただことないだろ？」
言うと、ヒナはまた笑って。家までの道、俺は精一杯おどけた。
ヒナが、笑うように。俺の気持ちを、隠すように。

第三話：日奈子の隣は俺だけだ！

やっぱり定期ないと金もかかるし時間もかかる。昨日はすっかりヒナに会って定期なくしたことすら、どうでもよくなっちゃったけど。よくよく考えたら俺の家から会社まで、片道千円かかるってどういうことだ。おいおい、こりや早急に定期買わないとまずい。でも給料日前で金ない俺。なにこれ。すっげー情けない。

なんて思ってた会社につくと、根岸が笑顔で近づいてきた。昨日の今日でタフなヤツ。お陰で俺まで普通の対応。

「おはよう！」

「おう、おはよー」

「なに？ 元気ないわねー」

「んー。ちよつとね」

ものつすごい明るい声で私のせい？ なんて聞いてくるから、思わず吹き出す。

「明るく自虐すんなよ」

「違う違う。本当に私のせいかも、と思つて」

そう言つて、根岸は俺の目線に、四角いものを出した。

「あー！」

「あ、やっぱりこれ、あんたの定期入れだったんだ」

なに飄々と言ってるんだ。おい、お前、俺の定期入れ見たことあるだろつが！ とは思つても、叫べないのが俺。

「ど、どこで拾ったんだよ」

しどろもどろ。

「昨日の食堂。あんたが行った後に気がついたの」

「おま、早く言えよ！」

お陰で昨日今日で二千円の出費だつつの！

が、根岸は相変わらず飄々としている。あまつさえにやりと笑いやがったし。くそー、なんか負けてる気がするのはなんだ。

「な、なんだよ」

「良い物、見ちゃった」

なんだ、その天国にでもいるかのような弾んだ声は。思わず心でつつこんで、根岸の顔を伺い見る。

「良い物？」

根岸はにやりとした嫌な笑みを濃くして、定期入れをぱかと開いた。

「あ、あー！」

そこには一枚の、ヒナの写真。思わず声を出すと、根岸はすまし顔でぱたと定期入れを閉じた。

「好きな子？」

顔を引きつらせながらも、嫌々頷く俺。

「彼女？」

もつと顔を引きつらせて、首を振る俺。

「ふーん、片思いなんだ？」

「悪いかよっ！」

定期入れを取り戻そうと手を伸ばすと、ひょいとかわされた。

「ただで返すと思う？」

「思わない。悪いがお前はそういう女だ。うん」

「そう正直に言われると、ちょっとむかつくわー」

俺にどうしろと？

「いや、ごめん。本当、ごめん。だから、返して？」

「嫌」

手を合わせて我ながら情けない声で言ったことは、呆気なく却下された――。

「ごめん！ 本当にごめんな」

ヒナの家の前。ヒナの帰宅を待ち伏せて、俺はヒナにはん、と目の前で手を合わせる。ヒナは一瞬残念そうな顔をしたが、すぐに首を振った。

「純ちゃん、仕事なんですよ？ 仕方ないよ」

ああ、せっかくのデートだったのに。ヒナと二人きりで出かけられる、しかもヒナが誕生日なんて絶好の告白日和になるはずだったのに！

くそー、根岸のヤツ。

「定期返す代わりに、日曜日遊んで」

だなんて。ヒナの写真を人質に取るなんて、なんて卑怯なんだ！などと心の中でわめいても、断り切れなかった俺。なんで強く言えなかったんだ、俺。ふがない自分が情けない。

そんな俺に、ヒナはにつこりと笑いかける。

「そんな泣きそうな顔しないでよ。私の方なら大丈夫だからさ」

なんて優しいんだヒナは！ 思わず抱きしめそうになって、俺はすんでの所で止まる。くつ、ここで抱きしめたら今までの苦勞がいや、なんの苦勞かわからないけど！ とにかく駄目だ。落ち着け、俺。

「本当に、気にしないで？ クラスの子に遊ばうって誘われてるしきやらつと笑うヒナに、俺も笑顔を返す。」

「そうか……でも本当にごめんな」

そんな気にしなくて良いってば。ヒナはそう笑って言うと、家に戻っていった。

そんなこんなで日曜日。良くも悪くも天気は晴天。悪くはないがしかし俺の心はどんより曇り空。とはいえ、根岸と一緒にいるのは楽しい。それがただ恋やら愛やらでないだけで。

待ち合わせ場所に現れた根岸は、普段パンツスーツが多いためか、フレアスカートが嫌に可愛らしかった。これで俺が根岸を好きならときめきを覚えるんだろうと思うくらいには。ただやっぱり俺はヒナが好きで、このスカート、ヒナが着たら可愛いんだろうなどと根岸にひどく申し訳ないことを考えていた。

「もー、そんなくっつい顔しないでくれる？ 今日普通の友達

として遊ぶんだからさ！」

着た早々、俺の背中をバシバシ叩きながら根岸が言う。それによ
うやく俺も笑顔になって。

「そうだな」

遊ぶなら思いつきり。そう思つて笑うと、根岸も笑つた。

正直に言つと、根岸と遊ぶのは楽しかった。手を繋いだりはしな
かったが、根岸の歩くテンポは俺が合わせなくても平気なくらいだ
つたし——つまり根岸はスカートなのに大股で歩く女なのだ——俺
の馬鹿話にも大声で笑ってくれる。一緒になってバカなほど笑いあ
える。

根岸となら、自分の気持ちを抑えなくても良いのかもしれない。
そんなバカなことを考え始めたのが、きつといけなかったんだと
思う。たぶん。いや。きつと。

「ちよつと疲れたー」

なんて根岸が言うので、俺らが今いる場所は洒落たオープンカフ
エ。と言つても、直接道に面しているわけではなく、テラスは道よ
りも一番高くなり木の柵もあるので、こちらからは道行く人を見ら
れるが、道からこちらを覗くことは難しい。

「ほい、お待たせー」

俺が根岸と自分のコーヒーを持って席に着くと、根岸はふくらは
ぎを軽くマッサージしていた。

「足、痛い？」

「うーん、このパンプス慣れないから、ちよつと疲れちゃったみた
い」

強がっているのか、笑つていても少しだけ眉が寄っている。

「なんだよ、ムリしてたのかよ」

「そうつわけじゃないんだけどさー」

往來に目を向けながら話す。人の波が激しい。さすが日曜日。

「あたた……ちゃー、やっぱり靴擦れしちゃったか」

根岸が自分の足を覗き込んでる間、俺はやることもなく、かといって根岸の足を見るのも失礼というか気まずい気がして、流れていく人を見ている。これでヒナが靴擦れしたー、とかなら、きっと俺は血相変えておろおろしてるんだろ。え？ 差別？ しょうがないじゃん。だって俺の愛しい愛しいヒナなんだからさ。

なんて思いながら通りの見ていた俺の瞳に映ったもの。

「あ」

「赤峰？」

根岸の声に気を取られることなく、俺は席を立ち上がりカフェの入り口まで走る。

「ちよつと、赤峰？」

ひよこひよこことついてきた根岸が、不審そうな顔で俺を見て、俺の見つめる方を見る。

「なに？ 誰か知りあいでもいたの？」

「……ヒナ」

「どうしたのよ、赤峰」

俺の瞳に映ったもの。

楽しそうに笑う、ヒナ。

ヒナの隣を歩く、ヒナと同年くらいの、男。

「ちよつと、赤峰？」

根岸に手を揺すられて、はっとする。人混みを見つめても、ヒナの姿はもう見えない。

——気にしないで？ クラスの子に遊ばうって誘われてるし。

ヒナの言葉が頭をよぎる。クラスの子。それだけで俺は、クラスの女友達と遊ぶのかと思ってたけど。

「そ、そうか……男だったのか……」

俺はよろよろと傍の柱に吸い寄せられるように抱きつき。

ヒナが消えていった方向を、呆然と見ていた。

第四話：日奈子じゃなきゃ、駄目なんだ…

駅の改札で、根岸を見送る。

「元気だしなよ。とりあえず、笑って」

ばんばんと腕を叩かれて、俺はとりあえず笑う。引きつつてるのが自分でもわかる。

あの後、精神的に再起不能になった俺を、根岸は懸命に慰めてくれた。それを素直に嬉しいと思いつながら、俺はどうしても、ヒナの笑顔を振り払うことができなかった。

「はー、なんで私、あんたを励ましてんだろ。あんた、覚えてる？ あんたが好きなのに、私ってばお人好しだわー」

根岸にそう言われて、俺は力なく笑った。

「……ごめん」

自分でも、何に謝ったか解らないまま謝ると、根岸はけらけらと笑った。

「いーよもう。ていうか、あんたの落ち込んだ顔でチャラね、チャラ」

一体俺を何だと思ってるんだ。などとは言えるはずもない。

俺の気持ちはぶくぶくと深海へ沈んでいくようだ。

というか。俺は今まで何も考えてなかったけど。もしかして、俺が何も考えずに振ってきた女の子に、いつもこんな思いをさせてたのか？

いや、俺はまだ振られてない！ ……と思うけど。うん、まだ振られた訳じゃない。アレが彼氏だと決まった訳じゃない。うん、大丈夫だ！

だけど。

振られてないのにこんなに落ち込んでる俺って。弱すぎて情けない。情けなくて切ない。あーもう、なんだって言うんだ。元気出せ俺！

そうは思っても沈んでいく思考。見上げた空のように暗い場所。なんで俺、ヒナが好きなんだろう。こんなにも愛おしい？ ヒナ以外、目に入らないんだろうか。根岸を好きになっていれば、きつとこんな苦しみはなかったのに。

だって仕方ない。

俺が好きなのはヒナで、ヒナ以外どうしても好きになれなくて。ヒナが大切で。ヒナが大好きで。

俺ってばモテるから、今までこんなに長い間好きだった子は、一人もいない。いつも向こうから言い寄ってきて、適当に好きになって適当に付きあつて。そして最後は向こうから離れていく。

「私のことなんて、好きじゃないんでしょ！」

そう捨て台詞を吐いていく子だっていた。

「あなたが私を好きなのかわからなくて、不安でしょうがなかった」
そう泣きながら訴える子だっていた。

でも俺には。彼女たちの気持ちがわからなかった。

だって俺はそれなりに好きだよ。それだけじゃ、駄目？ 一体なにが不満なの？

きつと俺は、相手の気持ちなんて一つも考えずに来たんだと思う。真剣に誰かの事を考えた事なんて、きつとヒナ以外、ない。

仕方ない？

違う、仕方なくない。

相手の気持ちかわからなくて、こんなに不安になるなんて、昔の俺なら笑い飛ばしてるところだろう。

「好きでもない子と付きあうわけないじゃん」

なんて笑い飛ばして。

そんなことを考えて、俺はずっとへたり込んだ。

「最低だ、俺……」

頭を抱えるようにしゃがみ込む。二十六歳、赤峰純。家の近くの三丁目、住宅地の路上の端っこで。なんて情けない図なんだろう。「やだっ！」

そんな俺の耳に飛び込んできた声。可愛くて、鈴のようで、澄んでいる声。

「……ヒナ？」

俺は立ち上がった、声のした方へ歩き出した。

俺が座り込んでいた三丁目の路上からさほど離れていない、四丁目の一角、児童公園。どうやら声はそこから聞こえてきたらしい。道路からは木の陰になって見えないが、ヒナともう一人、女の声がする。

「根岸？」

良く聞くと、どうやらそのもう一人は根岸の声に聞こえる。しかし根岸のことはさっき駅で見送ったというのに。どうして根岸がいるんだろうか。

二人に気がつかれないように、俺は木陰から覗いた。

公園の中には思った通り、ヒナと根岸。ヒナは困った顔で根岸を見て、根岸は不機嫌な顔でヒナを見ていた。

「説明してよ、なんで？」

根岸がヒナに言う。

「だから、なんであなたに理由を言わなきゃいけないんです？」

ヒナが困った声で答える。

一体、なんの話をしているんだろうか。

「あんだね、赤峰を悲しませてるんだよ！ わからないの？」

俺の話かよ！？ 思わずこけそうになる。ちょ、ま、えー？

「……純ちゃんのこと、好きなんですか？」

混乱する俺をよそに、ヒナが根岸に冷静に問う。根岸は一瞬詰まった後、大きく頷いた。

「そうよ。赤峰が好きよ？ 悪い？」

「悪くはないです。……だからそんなに一生懸命なんですか？」

相変わらず、冷静に言葉を発するヒナ。いつの間にかヒナの顔から表情が消えて、美少女だから余計に無表情が怖い。そんなヒナに

根岸は一瞬間をおきながらヒナに答える。

「だったらなんだって言うの？」

「私に言うより、純ちゃんにそれを伝えた方が早いんじゃないですか？」

俺の心臓が、一際大きく脈を打った。たぶん、根岸も一緒だったんじゃないかと思う。根岸が俯いて、公園には重い沈黙が降りて。

「……そんなの」

ぼつん、と小さな何かを落とすように。根岸が声を出した。

「そんなの、もうとつくに伝えて、とつくに振られてるわよ！」

強がっているのかいないのか、根岸の声はどこどころ揺れていて、泣いているようにも聞こえた。

「赤峰はね……あいつはね！？ あなたが好きなんだよ。だからあなたの行動一つであれだけ……！」

ヤバイ。と思った。

ヒナは俺の気持ちを知らない。伝えてない。こんな、こんな風に伝えたかったんじゃない。ちゃんと自分の口から。ほんの少しばかり根岸を恨んだ。人の気もしらないで、そんな軽々しく言うて欲しくなかった。

根岸のバカ野郎！

そうは思っても、もう伝わってしまったことは取り消せない。ヒナに知られてしまった。ヒナはどんな反応をするんだろうか。

ヒナを伺い見ると、どうにも言葉にできない複雑な表情をしている。

「……ヒナ？」

俺の呟きなんて、もちろん二人には聞こえない。ヒナは反応することなく、ただ笑って良いのか、それとも怒ったら良いのか、その間で揺れる顔で根岸を見ている。

「純ちゃんは、優しいだけだよ」

ヒナが、俯いた。

「純ちゃんはね、優しいから私の傍にいただけなの」

「そんなことは」

「それだけ、なの」

根岸の声を振り切つて、ヒナが顔を上げてきつぱりと言った。その顔には何の表情も読み取れなくて、根岸も声を詰まらせたまま。ほんの数秒なのか、それとも数分は経っていたのか、公園には妙な沈黙が落ちて、部外者であるはずの俺までいたたまれなくなつた頃。ヒナが泣き出しそうな顔をした途端、急に踵を返して走り出した。

「ちょ、日奈子ちゃん！」

根岸は追うことなくヒナの後ろ姿を見たままで。

俺は。

ヒナの後ろ姿を、今度こそ見失わないように、追いかけた。

「ヒナ！ …… ヒナ！！」

ようやくヒナに追いついて、走りながら手を取ると、ヒナは怯えた顔で俺を見返してきた。街道の横、歩道の端っこ。

「なに、逃げてんだ、よ……」

二人とも息があがつて、道行く人々は不思議そうな顔で俺らを見ているけど、そんなことには構っちゃられない。

「なんで、純ちゃんが、追いかけて、来るの」

そりゃごもつとも。ヒナは俺が掴んだ左手が気になるのか、ちらちらと見ている。

「ごめん、二人の会話、聞いてて」

言うつと、パツと顔を上げた。

「……人を振る理由に、私を勝手に使わないでよ」

「そりゃ誤解だつて」

うん、本当に誤解だ。俺は一言だつて好きな子がいるから付きあえない、なんて言葉で誰かを振った事なんて、ない。これは絶対。ヒナに誓つて絶対ない。

「あの人、純ちゃんは私を好きなんだつて言つてた」

「あー……」

「それは本当？ それとも、振る理由に使ってるだけ？」

いつになく興奮した様子のヒナに、俺は何も答えられない。ヒナの気持ちだけが、ヒートアップしていく。

「純ちゃんは、ただ優しいから傍にいるのかもしれないけど。私っ、私はっ！ 純ちゃんの傍にいる理由なんて、一つしかないんだよっ！？」

ぱつと手に衝撃が走って、ヒナが思いがけない力で俺の手を振り払った。

「……純ちゃんの、バカッ！！」

ヒナは大声で言うつと、急に走り出した。しかも車道に向かって。

「ちょ、ヒナ！」

バカはお前だー！ と叫ぶ暇もなく、ヒナは車道に飛び出して、そこにクラクションを鳴らした車が猛スピードで走り込んでくる。

「ヒナー！！！」

無我夢中、とでも言うのか、火事場の馬鹿力なのか。俺は自分でもわからないけれど、人生で一番早く走った気がする。

迫る車の前に飛び出し、両手でヒナを突き飛ばし。ヒナを飛ばしたその感触は確かに覚えているのに。その衝撃に、俺は満足感さえ覚えたというのに。

次の瞬間の事は、全く覚えていない。

第五話：俺とヒナとのラブライフ！

白いカーテンを突き抜けた朝の光に、俺は目を開ける。さっとカーテンが開いて、青白い空が眩しくて俺は目を閉じた。

「ちょ、眩しい……」

「だって空気入れ替えたいでしょ？」

ヒナが俺に笑いかける。

あれから一週間。

俺は確かに、あの時車にはねられた。記憶なんてないけど。ヒナを突き飛ばして、走り込んできた車に今度は俺が突き飛ばされて。しかし奇跡的なことに俺は頭を強く打っただけで、あとはかすり傷程度で済んだ。やはり日頃の行いが良いと、こういう時も神様に贖されるんだな。うん。

半日ほど意識を失っていた俺の視線の先に、泣きはらした顔のヒナがいた。

「何、泣いてんの」

手を伸ばしてヒナの頬に触る。普段ならとてもじゃないけどできないことを、あの時はできる気がした。むしろしなきゃいけない気がしてた。そんな気持ちを通じたのか、それとも同じ空気を感じたのか、ヒナはそれを嫌がることなく受け入れて。

「死んじゃうかと、思った……」

そう言っつて、また静かに涙を流して。

「俺が、ヒナを置いて死ぬわけないだろ？」

言っつと、こくんと頷いた。

「純ちゃんが、いなくなっちゃ、嫌だよ」

「ヒナ？」

「私、純ちゃんが傍にいないなんて、絶対、嫌だよ……！」

涙をぼろぼろとこぼしながらそう言うヒナが、あまりにも可愛く

て愛しくて、俺は思わずヒナを抱き寄せた。

「純、ちゃん？」

「そんなこと言うと、俺、一生ヒナにつきまとうけど」

ヒナが顔を上げた。まだ涙は浮かんでいたけれど、勝ち誇ったような笑顔で。

「私こそ、一生離れてなんか、やらないもん」

そう言っただけ抱きついてきたヒナを、俺が逃すはずないじゃん。当たり前。

「なーに笑ってんの？」

一週間前の事を思い出して、俺は一人にやけていたらしい。ヒナが俺を覗き込んでくる。

「やー、ヒナ可愛いなあって思っただけ」

「はいはい、寝言は寝て言っただけ」

顔を赤くして言っても意味がないことに、ヒナは一生気がつかなくて良いと思う。心の中でにやけながら、俺はヒナを抱き寄せる。

「ちょっと純ちゃん、朝ご飯食べようっておばさんが」

「んー、ちょっとだけ」

「もう……」

最初こそ不満そうな顔で睨んでいたヒナだが、ぎゅっと抱きしめなおすとうががないなあと笑った。

俺はヒナを見つめて。

ヒナは俺を見つめて。

そうして二人の距離はどんどん縮まって行く――。

「純ー！？ ヒナちゃんも、早くしないとご飯冷めるわよー！」

母親の声が階下から響く。

ヒナが思いつき俺を突き飛ばした。

「はいー！ おばさん、今行くねー！」

……あと数センチ。時間にして三秒。おいおいお袋、タイミング

良すぎだから。そんなくらい待ってくれたって良いじゃねーか！

「じゃ、純ちゃん、先行ってるね！」

耳を赤くしたヒナは、すると襖から出て行ってしまった。

突き飛ばされた俺は、突き飛ばされたままそれを見送って。

「……結局このオチかよー！」

きつと俺の声は、隣三軒まで響いたに違いない。

これが俺たちの始まり。俺とヒナとのラブストーリー。

え？ この後どうしたかって？ そんなの決まってるじゃない。

ヒナが短大卒業すると同時に俺と結婚。二年後には可愛い男の赤ちゃんと家族に加わる。ヒナの父親は最初こそ渋った顔してたけど、結局結婚式では一番浮かれていたかもしれない。根岸は俺たちのことを手放して喜んでくれて、まさに俺たちは順風満帆、天下無敵のラブラブカップル……なんてね。

話はまだまだ始まったばかり。俺とヒナはこれから新しい未来を切り開いて行く。たぶんまだまだ乗り越えなきゃいけない壁があるはずだから。それでも俺は、ヒナとの未来を夢見たい。

……え？ なんで急に真面目になるんだって？ いやだなあ、俺はずっと真面目だったじゃないか。ってごめん。ごめんごめん、ごめんなさい！ だからその石は降ろそうね？

ええと、うん。それでさ。だから俺はヒナが好きなんだよ！ 文句あるかこの野郎！

いや、文句はない？ うん、そうだね、ごめん。

そんなわけで、俺とヒナのお話はこれでおしまい。この先のことは俺とヒナの二人の秘密。勿体なくて、あんたらなんかにや教えてやんねー。うへへ。

そんなわけでお送りしました中編スペシャル『Love Me, Baby!』 スポンサーは俺、赤峰純でお送りしました。ナレーターも俺、赤峰順でお送りしました。

それではみなさん、良い週末を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2191b/>

Love Me, Baby!

2010年10月8日15時56分発行